



fig. 5 花粉・寄生虫卵組成図

4. 石組暗渠 SX10内堆積土の微遺体分析

第2次調査区で検出した石組暗渠内下層の淡灰褐色粘土の南側部分（試料1）と、北側部分（試料2）の2試料について良好な分析結果が得られたので報告する。方法は金原（1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構』奈良国立文化財研究所）にしたがい、花粉と寄生虫卵を対象とした。

寄生虫卵は試料2から回虫卵が1個検出されたが、通常の汚染の範囲であり、遺構の性格を限定するものではない。花粉遺体はベニバナ（*Carthamus tinctorius*, Linn.）の花粉が特徴的に多く、堆積土1cm³中に試料1で192個、試料2で756個という出現量を示す。他は試料2に食用となるソバ属の花粉があるのを除けば、通常出現する風媒花植物の花粉が少量含まれるのみである。

ベニバナ花粉は、花粉量が少なく分析に反映されにくい虫媒花であることを考慮すると、近くの畑などで栽培されていたものからの供給とみなすには相対的に出現量が多すぎ、ベニバナの花序を多量に使用する染織の廃液など特殊な供給源に求めるのが妥当と考えられる。他にヒノキの木材組織片が多く含まれていた。（天理大学附属天理参考館 金原正明、環境文化研究所 金原正子）